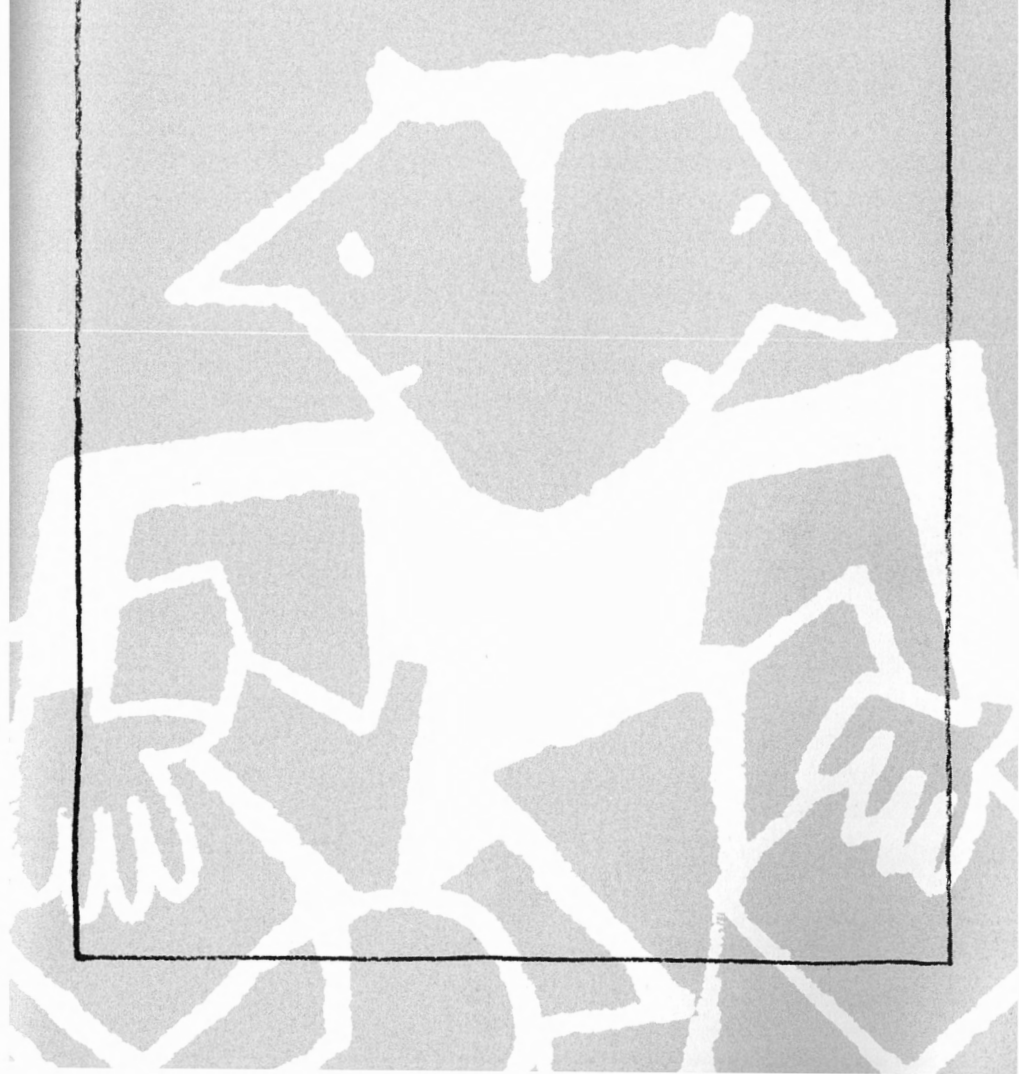


第7章
事例研究





研究対象としているフィールドに出かけて、ある事柄についてデータを収集する——これはフィールドワーカーなら一度は経験することだろう。しかし、どこでデータを集めても明快な結果が得られるわけではない。まず、「何を明らかにしたいのか」、「その解明のためにどんな事例を選ばよいか」が肝心だ。

◆キーワード：基本的な原理，一般的な問題，事例研究，事例，本質的なデータ

はじめに

フィールドワークによる研究の中で、最もよく使われる研究方法のひとつに事例研究がある。事例研究は、事例そのものの問題に答えることを目的とした研究ではない。調査の対象となるのはひとつ（あるいは少数）の事例ではあるが、その深い理解を通じ、事例が対象とする個別の地域や分野をこえた、より一般的な問題に答えることを目的とした研究である*1。

*1 ある特定の地域を対象にした開発プログラム策定や健康被害の原因究明を目的とした研究のように、事例そのものの理解を主眼とした研究もある。本章ではそれを事例の研究と呼び、事例研究と区別する。

しかしこの説明では、最も重要な2点、つまり事例の「深い理解」と、「一般的な問題に答える」という点があいまいなままである。事例をどの程度深く理解すればよいか、事例をもとにしてどのように一般的な問題に答えることができるのか、事例研究が単に事例についての研究ではなく、一般的な問題に答える研究であるために、どのような工夫がなされているのかについて、まず以下の論文を題材にして考える。

安岡宏和 (2004) 「コンゴ盆地北西部に暮らすバカ・ピグミーの生活と長期狩猟採集行 (モロンゴ) —— 熱帯雨林における狩猟採集生活の可能性を示す事例として」『アジア・アフリカ地域研究』4-1号, pp.36-85.

本論文 (以下, 安岡論文) は, アフリカ・コンゴ盆地北西部に暮らす狩猟採集民バカ・ピグミーの長期間の狩猟採集行に同行して得られた食糧獲得データを用い, 熱帯雨林で狩猟採集のみに依存した生活が可能かどうかを検証した論文である.

一般的な問題とは

先ほど, 事例研究とは, 「事例が対象とする個別の地域や分野を超えた, より一般的な問題に答えることを目的とした研究」であると述べた. 本章で述べる一般的な問題とは, ある特定の地域でのみ見られる限定された問題ではなく, 多くの地域で発生し, しばしば多くの要因が複雑に絡み合い, 答えるためには総合的なアプローチが求められる問題である. たとえば, 「持続可能な開発は可能か」, 「中央政府と地方政府はどのような役割分担が可能か」, 「新種の感染症の蔓延を防ぐには, どのような国を超えた協力体制が必要か」, 「社会変容の中でセーフティネットとしてのコミュニティの新しい役割は何か」といった問題がそうである. いずれも, 特定の地域での問題というよりも, 世界中の多くの場所で起こりうる (あるいは実際に起きている) 問題である. 答えることに学問上の意味がある問題だけでなく, 実際に解決を要する現代的な社会問題も含まれる. そうした一般的な問題に対し, なんらかの答えや, 解決に向けた指針を提供するために, 事例の詳細な調査にもとづく事例研究がおこなわれる.

写真7-1 「森の民」
ピグミーの子供たち
(撮影：安岡宏和)



ピグミーの森の生活

安岡論文が事例の分析を通じて答えようとする一般的な問題とは、熱帯雨林では狩猟採集のみに依存した生活は可能かどうかという生態人類学の問題である*2。

もともと、アフリカ熱帯雨林で森の民として知られるピグミーの人たちは、熱帯雨林の先住民であり、森の中で狩猟採集生活をしてきたと考えられてきた(写真7-1)。しかし熱帯雨林では、狩猟採集によって利用可能なカロリー源は季節的変動が大きく、とくに、乾季に利用できる食糧が極端に減少する。このため、熱帯雨林の狩猟採集民は、比較的新しい時代になって狩猟採集生活から定住化・農耕化へと移行してきたのではなく、狩猟採集民と農耕民は互いに手を携えて熱帯雨林地帯に入ってきたのではないか、そもそも熱帯雨林においては、農作物を利用せずに狩猟採集のみによって生活することは不可能なのではないかとする仮説が1980年代後半に提出された。この仮説を提出した研究者のひとりであるヘッドランドは、熱帯雨林で狩猟採集のみに依存した生活の可能性を検証するとき、食糧が不足する乾季の主要なカロリー源として唯一考えられるのはワイルドヤム(wild yam, 野生ヤム, 写真7-2)であることから、自身の問題提起をワ

*2 生態人類学：人間の生活に着目し環境への適応およびその進化を研究する人類学の一分野。中心テーマは生業を軸とし生物学的・社会文化的諸特性と有機的に関連づけながら人間-環境関係を具体的に解明することにある(石川栄吉ほか編(1994)『文化人類学事典』弘文堂)。

イルドヤム・クエスチョン (wild yam question) と呼んだ。

この仮説を十分な具体的資料にもとづいて検証することを目的に、本研究では、コンゴ盆地北西部にある狩猟採集民バカ・ピグミーのひとつの村を対象として調査がおこなわれた。

論文筆者の安岡は、調査村での狩猟採集活動に関するデータを収集するだけでなく、乾季におこなわれた集団 (89人) による長期 (約2ヶ月半) の狩猟採集行に同行し、その期間に獲得されたすべての食糧に関するデータを取得した。乾季の2ヶ月半におよぶ狩猟採集行の間、ピグミーの人たちは熱帯雨林の中で狩猟採集した食糧のみで生活を維持したのである。この時の食糧獲得データが本論の中心をなす。先に述べたように、安岡論文の一般的な問題とは、熱帯雨林で狩猟採集のみに依存した生活は可能かどうかであり、それに答えるためには、食糧獲得が最も困難になる乾季の食糧獲得データが重要になるからである。



写真7-2 掘り出した
ワイルドヤムを見せる
ピグミーの女性と子供
たち(撮影：安岡宏和)

長期狩猟採集行の食糧獲得データとして、狩猟で得られた動物類と、採集で得られた植物類のすべての名前（現地名・学名・和名）、獲得数および量、獲得方法が記載される。そして、すべての食糧をカロリーベースに換算し、両者の構成比が示される。その結果、1日の1人当たり摂取カロリーは2339kcalであり、成人男性が生活するのに十分なカロリー摂取量であること、また、全カロリーに占める割合は、狩猟で得られた獣肉類が24%、採集で得られた植物類が76%となること、採集物のうち全体の67%を占めるのがワイルドヤムであることがわかった。

これらの結果をふまえて、今回の事例の対象となった熱帯雨林では、食糧獲得が最も困難であると予想される乾季にワイルドヤムを主要なカロリー源として、狩猟採集のみに依存した生活を十分維持することができるかと結論づけた。

事例と一般的な問題

しかし、安岡が同行した1回の長期狩猟採集行の食糧獲得データを提示するだけでは、熱帯雨林で狩猟採集のみに依存した生活が可能かどうかという一般的な問題に十分に答えたことにはならない。

安岡論文に限らず、事例研究が答えようとする一般的な問題は表現が抽象的で対象とする範囲が広い。限られた事例のデータから、どのように一般的な問題に答えることができるのかを示す必要がある。そのためにはまず、事例研究を開始する前に、一般的な問題に答えるために、なぜその事例が選ばれたのかを考えておく必要がある^{*3}。

*3 事例の選択については本章コラムも参照。

事例の選択

事例研究の開始時、予備的な調査や先行研究のレビューをおこない、一般的な問題の設定と、その問題に答えるためにどのような事例を調査することが適当であるのかを調べる。

一般的な問題が対象とする地域や分野は広く、その中で研究の直接の対象となり、詳しい調査がおこなわれる事例から、一般的な問題にどのように答えることができるのかを前もって知る必要がある。別の言い方をすれば、研究すべき一般的な問題が何であるかを明確にしなくては、事例を選ぶことさえできない。

ただし、事例を選ぶとは、サーベイ型調査でサンプルを偏りのないよう、いかに選ぶかといった問題ではない。事例研究は一般的な問題に答えようとしており、そのために必要な事例が選ばれなくてはならない。したがって、事例の選択とは、調査によって何を明らかにするのか、そこで得られた知見から一般的な問題にどのように答えることができるのか、そのために必要なデータは何か、データをどのように分析すれば良いのかといった研究の方向性を決定するきわめて重要な作業になる。事例研究における事例は、研究者が研究上の明確な意図をもって選択されるものである。

安岡論文の場合、ワイルドヤム・クエスチョンに答えるために事例が選択されている。すなわち、熱帯雨林では狩猟採集のみに依存した生活は可能かどうかという学問上の問いに対して、食糧獲得が最も困難になる乾季の食糧獲得データが重要であり、そのため、乾季におこなわれた長期の狩猟採集行を事例としたのである。

しかし、事例研究における事例の選択は、時に難しい問題となる。論文の記載を読むと、調査が開始される前に事例はすでに明確に選択されているように思えるが、実際に事例研究がおこなわれる過程を見ると、事例の詳しい調査から見出された知見が、調査開始前に想定されていたような問題ではなく、別の一般的な問題に有効な答えとなることもある。安岡論文でも、安岡本人によると、実はワイルドヤム・クエスチョンに答えるために事例を選んだわけではなかったという。そのような場合でも、事例研究としてまとめ、論文やその他

の手段により公表する場合には、明確に、なぜその事例が選ばれたのかを説明する必要がある。したがって、事例研究の開始時だけでなく、事例研究の全過程で、すなわち、事例研究の開始から、テーマの設定、データの収集と分析、結果のまとめに至るすべての過程で、対象としている事例の調査からどのように一般的な問題に答えることができるのかを考えながら研究を進めることが重要になる。そして、そのためには、冒頭で述べたように、事例の深い理解が必要になってくる。

事例の深い理解と基本的な原理

一般的な問題が対象とする広い範囲の中で、ひとつ（あるいは少数）の事例という限られた調査対象から得られた知見を用いて、一般的な問題にどのように答えることができるのだろうか。そのためには、事例で得られた知見が、単にその事例にのみ見出されるものではなく、より一般性を持ち、研究が対象としている一般的な問題に対して何らかの答えとなることを示さなくてはならない。そして、そのために、事例研究の対象となっている事象を説明する最も根幹部分の原理、事象のメカニズムを説明する最も基本的な原理を見出すことが必要になる。このような、ある事象の根本的な説明原理を以下では基本的な原理と呼ぶ。

事例の基本的な原理を見出すことが、一般的な問題に答えるために必要となるという根拠は、事例をとりまく社会や文化、自然生態系、経済システムといった、より広域の範囲に共通して見られるシステムや制度が、事例にも反映されているはずであると考えられることにある。事例に反映されている、より広域のシステムや制度の基本的な原理を見出すことで、事例を、そうしたシステムや制度に特有の問題を考えるための材料とすることができる。基本的な原理を見出すことにより、事例から得たデータや知見を用いて、広域のシステ

ムや制度について論じることができる。そして、基本的な原理を見出すことこそが、事例の深い理解なのである。

安岡論文の基本的な原理

安岡論文では、長期狩猟採集行で得られた食糧獲得データを単にカロリーベースで示しただけではなく、事例で対象としていた長期狩猟採集行で、食糧獲得がどのようなメカニズムでおこなわれているのかを示すために、今回の事例となった長期狩猟採集行の地理的な広がりや歴史的背景に関するさまざまなデータが取得・分析されている。

植物利用の調査からは、狩猟採集によって獲得された植物のなかで食糧源として重要な位置を占めていたワイルドヤムと総称される植物は、大きく2種類に分かれることがわかった。雨季に分散して自生し、ひとつひとつの塊根（イモ）は比較的小さいが肥大する時期に季節性はみられず、そのため採集も1年を通じて可能であるものと、乾季に群生し、塊根は比較的大きく、肥大する時期が乾季に限られるものがあつた。

動物相の分析から、猟の方法は森の動物相を反映した合理的な方法であることがわかつた。過去20～30年の間におこなわれた狩猟採集行の地理的範囲と歴史的変遷に関する聞き取り調査から、1950年代に政府の定住化政策が始まる以前は、ワイルドヤムだけでなくさまざまな動植物を獲ることができ、1年以上の長期にわたって森の中で生活していたこともあつたことがわかつた。しかし、50年代に定住化政策が導入されてからは、長期の狩猟採集行がおこなわれる地理的範囲は狭くなり、近年になるほど、乾季に肥大するワイルドヤムが比較的多く見られる森でおこなわれていたこともわかつた。

このように、安岡が同行することのできた1回の長期狩猟採集行が、どのような地理的・歴史的広がりの中でおこなわ

れたかを詳細に明らかにし、これらの事実から、狩猟採集のみに依存した生活、より根本的には、熱帯雨林の産物に依存した生活の基本的な原理が見出された。長期狩猟採集行の基本的な原理は、熱帯雨林内のさまざまな生態的特性に応じた自然資源の利用にあった。

安岡によれば、熱帯雨林で得られる食物資源は大きくふたつに分けることができた。乾季に肥大するワイルドヤムのように、利用できる期間に季節性があり、獲得できる場所も限定的（集中的）な食物資源と、逆に、ある種の動物や果実、種子、蜂蜜のように、通年利用可能で、獲得できる場所も分散的である食物資源とである。狩猟あるいは採集の労力から考えると、前者は大集団でも効率は悪くならないが、後者は小集団のほうが効率的であり、実際、森の中に分散して生息する小動物類は小集団で狩猟され、乾季のワイルドヤムのようなものは大集団が組織され採集されていた*4。すなわち、森の中でもともと遊動的に暮らすピグミーの人びとは、季節的・集中的な食物資源と、通年的・分散的な食物資源のそれぞれの入手可能性にしたがって、その集団の規模を大きくしたり小さくしたりして生活していた。1950年代以降、定住化政策により農耕生活がピグミーの人たちの生活に浸透したため、雨季の間は農耕に依存した生活が主になったが、乾季には今でも数年に一度、大規模な集団で狩猟採集行がおこなわれていた。安岡が同行した狩猟採集行は、ピグミーの人たちの熱帯雨林産物に依存した生活の基本的な原理が定住化政策の下で現代的に変容して現れたものであった。

*4 乾季のワイルドヤムは、小集団で採集しても効率が悪いわけではないが、実際には大集団でおこなわれている。その理由は、安岡によれば、生態的な条件よりも、社会的・文化的要因が大きいという。ただし、本論文では、民族や社会組織といった文化的・社会的要因についての詳細な分析はおこなわれていない。

基本的な原理と一般的な問題への解答

事例として分析を進めてきた長期狩猟採集行の基本的な原理が提示されると、熱帯雨林で狩猟採集のみに依存した生活は可能かどうかという安岡論文の一般的な問題に、どのように答えることができるのだろうか。

カロリー換算した食糧獲得データにより、今回の調査が対象とした長期狩猟採集行の事例は、食糧が不足すると考えられていた乾季の2ヶ月半の間、熱帯雨林から十分な食糧を獲得可能であることが明らかになっていた。これは重要なデータではあるが、データ提示の段階では事例が一般的な問題に答えるためのひとつの事例として適当なのかどうかはわからなかった。しかし事例の基本的な原理を説明することで、一般的な問題にどのように答えることができるのかが明確になる。

安岡論文では、長期狩猟採集行の基本的な原理は、熱帯雨林内のさまざまな生態的特性に応じた自然資源の利用にあった。熱帯雨林における食物資源の地理的な分布と、果実や種子、塊根を形成する植物資源の年間のサイクルとに従って狩猟採集生活がおこなわれていた。このことは、今回の長期狩猟採集行で得られた食糧獲得データを、そのような生態的特性のもとにある熱帯雨林での狩猟採集生活のひとつの事例とみなすことが可能であることを示している。したがって、長期狩猟採集行の食糧獲得データは、安岡が調査した事例にのみあてはまる特殊なデータではなく、熱帯雨林での狩猟採集生活に一般化して議論することのできるデータであるとみなすことができる。そして、その上で、事例から得られた食糧獲得データは、熱帯雨林の中で狩猟採集のみに依存した生活が十分可能であることを示しており、ワイルドヤム・クエスチョンの仮説を反証することのできるデータであることが理解される。

事例研究のプロセス

本章の冒頭で述べたように、事例研究は、事例の「深い理解」を通じて「一般的な問題に答える」ことを目的とした研究であった。安岡論文における事例の「深い理解」とは、狩猟採集のみに依存した生活の基本的な原理を見出すことであ

った。安岡が同行することのできた、長期の狩猟採集行の地理的範囲や歴史の変遷に関する詳しい説明をすることが「深い理解」ではなかった。詳細な情報の分析を通じて基本的な原理を見出すことにより、事例研究で得られたデータや知見が、その原理を共有する母集団（安岡論文の場合、正確には、季節的・集中的な食物資源と通年的・分散的な食物資源とが人びとの生活を維持するだけ十分に存在するような熱帯雨林）のひとつの事例とみなすことができる。そして、事例から得られたデータを用いて熱帯雨林を対象にした一般的な問題に新しい知見を加え、従来の学問的な仮説にひとつの答えを与えることができた。

この時、注意すべきは、事例の限られた知見と一般的な問題とをつなぐのは、基本的な原理を共有する母集団だということである。事例を一般化するプロセスは、たとえば、事例となっていた調査村での知見を、県レベル、地方レベル、国レベルであてはまるかどうかを順番に検証したり、単純な地理的拡大をおこなったりすることではない。むしろ、事例から得られた基本的な原理を共有する母集団の範囲を特定することが事例の一般化にとって重要である。事例という小さな窓を通して、基本的な原理を共有する母集団の範囲をみきわめ、そこから一般的な問題に新しい知見を加えることが事例研究の最も重要なポイントでありいわば醍醐味でもある。

基本的な原理

本章ではこれまで、事例研究のプロセスにおける最も重要な2点について述べてきた。事例の「深い理解」と「一般的な問題に答える」ことである。そして、そのいずれにも関係する重要な点は、事例の中に見出され、研究が対象とする事象の基本的な原理を見出すことであった。以下では、この点をもう少し詳しく見ていこう。

基本的な原理を見出すプロセス

事例の基本的な原理を見出すには、まず、さまざまなデータから、基本的な原理にとって、より本質的なデータを選びだし例外的なデータを区分する必要がある。そして、本質的なデータから、基本的な原理をエッセンスとして抽出する。基本的な原理を見出すこのプロセスを、今度は以下の論文を題材にして具体的に考えてみる^{*5}。

四方箒 (2004) 「二次林におけるプランテインの持続的生産——カメルーン東南部の熱帯雨林帯における焼畑農耕システム」『アジア・アフリカ地域研究』4-1号, pp.4-35.

焼畑農耕システムの基本的な原理

本論文（以下、四方論文）は、アフリカ、カメルーン東南部の熱帯雨林帯に暮らすバンガンドゥの人たちの焼畑農耕を事例にして、熱帯雨林におけるひとつの焼畑農耕システムの解明を目的とした研究である。



*5 以下の記述は、本論文だけでなく、四方の発表論文、四方箒 (2004) 「「休閒畑」からの収穫——カメルーン東南部の熱帯雨林帯における焼畑農耕システム」, 21COE プログラム主催京都ワークショップ「フィールドワークから紡ぎだす——発見と分析のプロセス」, および、四方本人へのインタビューとに拠る。

写真7-3 プランテイン（料理用バナナ）を運ぶの女性（撮影：四方箒）

本論文で示された焼畑農耕システムにおける基本的な原理は、年間を通じて継続的にプランテイン（料理用バナナ、写真7-3）の収穫を可能とする点にあった。主食となるプランテインの植物的な特性と、熱帯雨林における二次林の生態的な特性とを利用して、バンガンドゥの人たちは、毎日途切れることなくプランテインを収穫していたのである。

噛み合わない会話からの気づき

フィールドワークによって得られるさまざまな情報は、雑多で断片的なものである。それらをもとに、基本的な原理を見出さなくてはならない。そのためには、膨大なデータの中から、基本的な原理にとって本質的なデータとそうでない例外的なデータとを区分する必要がある。

先行研究も含めて、バンガンドゥの焼畑農耕システムに関するさまざまな情報の中で、その事例研究にとって何が本質的なデータであるかは、とくにフィールドワークの当初はよくわからない。四方も、フィールドワークの初期には、植生調査や植え付け密度の調査、生育量や畑の面積の計測など、通常の焼畑研究ではごくあたりまえの農学的な調査を繰り返した。

また、森を伐開して1年目にはトウモロコシ、キャッサバ、プランテイン、ココヤムなどが同じ畑に混植されていた。一般に、焼畑による栽培では、土壌の肥沃度が高い1年目の畑に主食となる作物を栽培することは、ほとんど常識とってよい。しかし、そんな常識はこの畑では通用しない。

農作業に関する村人との話も、どうも四方の認識と噛み合わない。たとえば、ある人が焼畑地で丁寧な除草作業をしていたという話をお世話になっている村の人にすると、大笑いされる。キャッサバ畑に行くという村人についていくと、いつもの混作畑に到着し、キャッサバには目もくれずプランテインを収穫して帰る。ひとつの畑にたくさんのプランテイン

を植え付けている人の話をすると、それはプランテインの植え方を知らない人だと笑われる。

このように、さまざまな調査方法の試行錯誤と、村人との噛み合わない会話を経て、四方は考え方を変えなくては本質的なデータが得られないことに気づく。

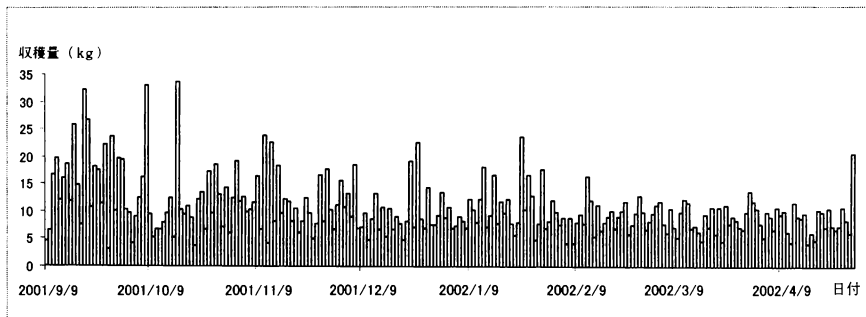
ブレイクスルー

あるとき四方は、女性Vさんに依頼してプランテイン収穫量の記録を始めた。図7-1がその結果であり、記録は8ヶ月間にわたって続けられた。

このデータが、四方にとって、焼畑システムを理解するためのブレイクスルーとなった。四方はこれまで知らず知らずのうちに、いかにたくさん収穫できるかという観点から焼畑システムの調査をしてきた。しかし、バンガンドウの焼畑システムの基本的な原理は、どうやら、プランテインを継続して収穫できることにあるのではないかと気がついたのである。この図をもとにして以下のような解説が加えられる。

プランテインの収穫は調査期間中1日も途切れることなく毎日おこなわれていた。このような収穫方法は、プランテインが収穫後に保存しておくことができないことや、果実の収穫適期が短く、収穫期を迎えた果房を長い間畑に放置しておくことができないこと、また

図7-1 女性Vさんのプランテイン収穫量(kg)の変化
(2001年9月9日～2002年4月30日)
出所：四方論文の図9を一部改変



重い果房を畑から持ち帰ることのできる重量が限られていることなどを反映している。

そして、四方は、継続性という観点から焼畑作業全般を見直し、データを整理した結果、次のようなバンガンドゥの焼畑システムの理解に到達した。

焼畑農耕システムの基本的な原理

バンガンドゥの人たちはプランテインを重要な食糧源として位置づけていた。熱帯雨林の中で、植え付け時期をとくに選ばず一定の期間（およそ1年前後）栽培すれば果房を収穫できるプランテインの植物的な特性を利用し、人びとは比較的小さな畑に時期をずらして植え付け、しかも収穫できるまでの期間が異なる多数の品種を栽培していた。プランテイン以外の作物も混作することで、継続して収穫することを可能としていた（写真7-4）。

さらに、この焼畑農耕システムを支える生態的な基盤は、旺盛な成長をとげる二次林にあった。プランテインを焼畑で栽培するには十分に植生の回復した二次林が必要となる。生育がとくに早いムサンガ（学名：*Musanga cecropioides*）と

写真7-4 混作畑からの収穫（撮影：四方篤）



いう樹木が、二次林の植生回復に大きな役割を果たし、焼畑によるプランテインの栽培を可能としていた。

また、二次林の回復には、焼畑におけるバンガンドウの人たちの栽培管理が一役買っていた。プランテインは、植物体がある程度生育した後は弱光下でも果房が大きくなり新しい株が繁殖する。植え付け直後の畑での除草が優先されるため、植え付けからある程度時間の経過した畑でほとんど除草はされない。このことが、伐開された焼畑地の植生を急速に回復させる一因にもなっていた。その結果、プランテインの収穫はあたかも藪の中からおこなわれているように見えた。このように、年間を通じて継続的にプランテインの収穫を可能とするために、プランテインの植物的な特性と、二次林の生態的な特性とを利用して、焼畑によるプランテインの栽培がおこなわれていたのであった。

噛み合わない会話の解釈

継続性という観点からデータを整理すると、それまで断片的で、時には矛盾したデータが、ひとつの焼畑システムとして整合的に理解できるようになった。四方が当初、村人とかわしたときに噛み合わないと感じた会話も、継続性という観点から考えれば、理解することができるようになった。

ある程度生育したプランテインは弱光下で生育するため、村の人に笑われた丁寧な除草はとくに必要ないばかりか、プランテインの生育基盤となっている二次林の十分な植生の回復を遅らせるという意味において、まさに笑われるほど無意味な行為であったと言えよう。キャッサバ畑に行くという村人についていくと混作畑に到着し、しかも、プランテインを収穫して帰るといった行動も、継続性という観点から見れば理解できる。すなわち、小面積の畑を多数持ち、たくさんので作物を植えていることがポイントである。畑の呼び方は植え付け時の作物名ではなく、おそらく利用の便を考えて、作物

の生育段階によって変わること、また、多数の作物が栽培されているため、キャッサバ畑でプランティンを収穫することに何ら矛盾のないことも理解できた。さらに、たくさんのプランティンを局所的に植え付けることは、いつきの収穫量は多くとも、貯蔵が難しく重量のあるプランティンをそのように栽培しては、継続的な利用ができず、運搬に支障のでもこともわかった。このように、基本的な原理を見出すことにより、フィールドで経験するさまざまな疑問を整合的に理解することができるようになったのである。

本質的なデータと例外的なデータ

事例の基本的な原理を見出すには、まず、さまざまなデータから、基本的な原理にとって、より本質的なデータを選びだし例外的なデータを区分する必要があると述べた。ここで言う本質的なデータとは、研究が対象としている事象の基本的な原理にとって本質的であるという意味であり、データそのものに本質的あるいは例外的な意味があるわけではない。

たとえば、噛み合わない会話の例に登場した除草を丁寧にする人や、プランティンをたくさん植え付ける人の話も、継続的な焼畑農耕システムの基本的な原理を説明するには例外的なデータであるが、決して無駄なデータだというわけではない。除草を笑われた人は、実は、別の農耕民出身であり、四方の調査地である村に移住後、焼畑を見よう見まねではじめた人であった。このような人たちのもたらす技術や文化が、バンガンドウの人たちの焼畑農耕システムにどのような変容をもたらすかといったことが研究テーマであれば、一見とんちんかんな移住者の農作業も重要なデータになってくる。

このように、データの持つ意味は決してひとつではなく、ある事象の説明にとっては不必要であっても、別の事象を説明するときに重要な意味を持つことがある。個々のデータが本質的であるかどうかは、事例研究が対象とする事象の基本

的な原理にとって本質的かどうかにかかっている。本質的なデータを区分することと基本的な原理を見出すことは密接に関係している。したがって、思考の過程は、本質的なデータの区分ののち基本的な原理を見出すというような、段階的プロセスを経るのではない。基本的な原理が何かを考えつつデータを区分し、データを整理しつつ基本的な原理を考えることが重要になる。

事例研究のプロセス

以上、ふたつの論文を題材にして、事例研究のプロセスを考えてきた。事例研究は、ひとつ（あるいは少数）の事例の詳しい調査にもとづいて、研究が対象としている事象の基本的な原理を見出し、事例が対象とする個別の地域や分野をこえた、より一般的な問題に答えることを目的とした研究であった。基本的な原理を見出すことによって、その原理を共有する母集団を特定し、事例から得られたデータや知見を用いて一般的な問題に答えることができた。

このように、事例研究は、事例のデータや知見という限られた材料をもちいて、一般的な問題について考えるための研究方法である。フィールドワークによる研究では、事例研究は最もよく使われる研究方法のひとつである。事例そのものの理解を目的にした事例の研究や、事例で起きている現象をデータとして提示する事例報告とは区別し、一般的な問題に果敢に挑戦してみよう。

(柳澤 雅之)